

# 高崎の観光 再発見

vol.1

## ～大信寺～



大信寺



## 徳川忠長

### 血で染まった葵の紋

1633年12月の宵、高崎城離れの御殿に酒の肴を運んだ侍女の悲鳴が響いた。

襖や障子に血が飛び散り、血の海の中に葵の黒紋付と白小袖を整えた若者が、うつぶせに倒れている。両手で持った脇差で自らの首を突き刺し、既に息が絶えていた。3代将軍徳川家光の弟、駿河大納言忠長卿の凄惨な最後である。御歳28歳だった。

高崎のまちなか、慈光通りから飲み屋横丁を歩くと、まもなく大信寺が目に入る。伽藍の横を抜けると廟所があり、五輪の塔のもとで、忠長は静かに眠っている。かつてこの廟所は立派な葵の紋の唐門と黒塀に囲まれ、「大納言さん」と呼ばれていたこともあった。

### 江と春日局の激しい確執

忠長は、2代将軍秀忠の三男として生まれた。秀忠の妻は、NHK大河ドラマの主人公「江」で、8人の子があった。兄は家光、忠長は下から二番目の子だった。

江は、仇の春日局になつく家光よりも忠長を可愛がった。忠長は、幼時から容姿端麗で賢く、兄よりも将軍にふさわしいと江は考えた。この為、大奥は激しい抗争となり、春日局が御所家康に直訴する。家光派が勝利をおさめた。

### 高崎城幽閉

将軍の座につけなかったとはいえ、江に溺愛され育った忠長は誇り高く、口憚ることがなかったという。駿府城と55万石をもらい、「駿河大納言」とよばれるようになった。まるで将軍家のように、家光、春日局にはおもしろくなかった。

忠長は乱心を理由に領地を取り上げられ甲府に流された。父秀忠が死去すると、幕府はその年、忠長を高崎城内に幽閉することを決めた。忠長はわずかな従者を連れて、雨の中を甲府から高崎に移った。

### 「遺愛の松」

その年の秋、兄の家光は忠長に自害を命じる。2ヵ月もの間忠長に伝えることをためらった城主安藤重長ではあったが、心を決め12月6日の朝、忠長の寝所の回りに鹿垣を巡らすよう家臣に命じた。厳重な鹿垣をみた忠長が番侍に問うと「將軍様のご命令でございます。詳しいことは下々にはわかりません」と平伏した。この時、忠長は全てを悟ったという。

忠長は罪人として埋葬された。当初墓は作られず、しかしその怨霊を恐れ「遺愛の松」が植えられた。遺愛の松は、樹齢300年を超えて昭和に枯れ、大信寺客殿の天井板になった。



大信寺にある  
徳川忠長の墓

寺には自刃の短刀や硯箱、姉千姫から贈られた袈裟などの遺品が位牌とともに安置されている。法名は「峯巖院殿前亞相請徹暁雲大居士」。時代劇の「松平長七郎」は、忠長の落胤とされている。